

老人性難聴に対する詳細な聴取評価法と聴覚認知訓練の開発に関する研究

研究代表者 山岨 達也 東京大学耳鼻咽喉科教授

研究要旨

老人では末梢性の聴覚障害のほかに、音信号の分析・抽出・認知・記憶・理解といった中枢における聴覚処理の障害が大きく影響していることが明らかとなっている。しかしながら、これらを評価する手法や、中枢聴覚処理への治療的アプローチを行った穿孔研究は本邦にはない。このような背景から本研究では、中枢聴覚機能の評価方法の開発及び、中枢聴覚機能のリハビリ・トレーニングを目的としたハード・ソフト両面の開発に取り組んだ。中枢聴覚機能の評価方法として、雑音下における67s式語音聴取能検査・長文節聞き取り検査・事象関連電位検査を確立した。リハビリトレーニングのプログラムとしてはi-padを用いたゲーム形式のプログラムを作成し、音の変化弁別・音の途切れの判別・複雑な構文を判別する訓練を組み入れた。来年度はこれら検査・プログラムを被験者対象に施行することで、基準値の確定を行う予定である。雑音下67s式語音聴取能検査ではすでに一部データを取得しており、加齢に伴い騒音下での聴取能が悪化する傾向が認められており、検査としての有用性が期待される。

山岨 達也  
国立大学法人東京大学  
耳鼻咽喉科教授

A．研究目的

本邦の高齢者難聴有病者数は1655万人と推測され（内田ら、2013）、老人性難聴に対する対策は重要な課題である。老人性難聴では「音は聞こえるが、内容が聴きとれない。特に雑音下での聞き取りが困難」という特徴がある。老人性難聴では末梢聴覚障害による聴覚閾値上昇に加え、中枢聴覚処理の障害が会話聴取に大きく影響する。会話聴取では内耳からの信号を聴覚神経回路で迅速に処理し、併存する環境音（雑音）から必要な会話情報を抽出・理解することが求められ、会話情報への注意・一連の情報の保持といった記憶・認知作用も重要な役割を果たす。老化に伴い聴覚神経回路における伝達速度・刺激回復時間などの機能低下が起こるため、雑音下など複雑な音入力変化に処理が対応できなくなり、さらに記憶・認知機能の低下も起こるため、会話情報の保持・理解が一層困難になる。

老人性難聴への治療戦略として、末梢聴覚障害に対しては騒音曝露や酸化ストレスの予防、抗酸化物質の摂取などが予防として提唱され（Yamasoba et al. Hear Res 2013）、内耳再生医療・ハイブリッド型人工内耳の適応拡大などの研究も進められている。一方中枢聴覚処理について、神経の可塑性に着目したトレーニングが海外で報告されてきており、聴覚を用いた認知トレーニングが高齢者の聴覚の維持・回復の手段として有効であると示唆されている。最近Andersonら（PNAS, 2013）が高齢者を対象に聴覚を用いた認知トレーニングを行い、対照群と比べ騒音下での聴覚神経反応が速くなり、聴取成績が向上すると報告した。残念ながら本邦では中枢聴覚処理が重要であることは認知されているが、その評価法は確立されておらず、また中枢聴覚のリハビリに対する取り

組みはない。聴取能の評価では単音節による語音聴取能検査がまだ本邦では主流であるが、このような単純課題では中枢聴覚機能の評価することはできない。聴覚を用いた認知トレーニングは本邦にはなく、言語的な違いから海外のプログラムの直接導入は不可能である。

このような背景から本研究では本邦独自の日常生活を反映する聴覚機能の評価法および中枢聴覚機能の強化を目的とした聴覚を用いた認知トレーニングを開発することを目的とした。

B．研究方法

1．中枢聴覚機能の評価方法の開発

中枢聴覚機能の評価方法として、下記3項目を検討する。

1-1 雑音下におけるs67式語音聴取能検査

通常臨床において使用しているs67式語音聴取能検査の検査音にスピーチノイズを挿入し、ノイズの大きさに伴うその正答率を評価した。静寂下において正答率が最高となる音圧を用いて、S/N比+10より開始し正答率を測定する。その後正答率が20%をきるまでS/N比を5dBずつ下げてゆき、S/N比と正答率の関係を被験者の年齢に応じて解析する。

1-2. 長文節文章聞き取り検査

長文節の文章・音声を作成するに当たり日本音響学会 新聞記事読み上げ音声コーパス（JNAS）を用いた。JNASは新聞記事文16176文を306名の話者により録音した音源である。この音源より、5～7文節という比較的長文の文章を抽出するプログラムを作成・抽出を行う。抽出した文章の聞き取りを若年健聴者・高齢者に対して施行し、正答率を比較する。

1-3. 事象関連電位の測定

2種類の異なった音刺激を連続して聞かせ、

経頭皮的に脳電位変化を測定した。健聴者を対象に様々な音刺激を聞かせることで電位変化の測定を試みた。

## 2. 中枢聴覚機能リハビリ・トレーニングプログラムの開発

高齢者でも操作性がよく、かつプログラム開発も容易なApple社のi-Padをインターフェースとして採択し、開発を行った。

(倫理面への配慮)

開発した評価方法、リハビリプログラムを被験者を対象として行うに当たり、次のようなことを行う旨を、東京大学倫理委員会へ届け出、承認を得た。1. 対象者には事前にインフォームドコンセントを行い、同意書を得る。2. 被験者資料については連結可能な匿名化を行い、対応表を厳重に管理する。データは施錠可能なロッカーあるいは外部と接続しないパスワードのかかったコンピュータに保管する。3. 研究結果の発表においても、個人が特定できない形で行う。

### C・D. 研究結果及び考察

#### 1-1. 雑音下におけるs67式語音聴取能検査

現在までに、49名のデータを取得した。感音難聴では静寂下での最高語音明瞭度が80%以上の耳に絞ると、若年者ではS/N=10dBまでは比較的正答率が保たれるのに対して、高齢者ではS/N=10dBより正答率の大幅な低下が認められた。(図1参照)これらは高齢者の認知機能低下の要因を反映していることが考えられる。しかしながら、各年齢層の聴力図を比較すると高齢群の方で聴力が悪い症例が多く含まれる傾向もあり(図1参照)若年層・難聴者、高齢群・健聴者のデータを積極的に収集して解析してゆく必要があると考えられた。

#### 1-2. 長文節文章聞き取り検査

コーパスより長文節文章を抽出するプログラムを完成した。ここより試験的に5文節、6文節、7文節の文章を抽出し、健聴者対象に施行した(図2)。文節数によっても難易度は異なるが、文節における単語の難易度も影響があることが推測された。今後候補対象とする文章を増やし、正答率を検討することで、検査として適切な文章を選択することができると思われた。

#### 1-3. 事象関連電位の測定

事象関連電位の測定システムを完成させた。完成したシステムを用いて、a-o,u-iの音声におけるACCを健聴者を対象に計測できることを確認した(図3)。今後刺激音を変更(母音・母音、母音・子音、後続母音が同一の子音など)し電位の変化の確認を行うとともに、高齢者を対象に同様の刺激に対する電位の変化を確認する予定である。

## 2. 中枢聴覚機能リハビリ・トレーニング

## プログラムの開発

音高変化の弁別を行う課題、音の途切れ(Gap)の弁別を行う課題を基礎的な訓練プログラムとして、複雑な構文(~している~が~を~した)を実践的なプログラムとして聞き、それに合う絵を選択するプログラムを作成、ゲーム形式で行えるようにした(図4)。得られたデータはネットを介して回収も将来的には可能であり、プログラムをネットで配布することで全国から膨大なデータの集積も可能となりうる。難易度はその正答率に応じて上昇するプログラムとなっており、継続して訓練が可能なものになっている。今後順次被験者を募集し施行しプログラムをかりようしていく予定である。

### E. 結論

中枢聴覚機能を評価するための検査方法及び中枢聴覚機能のリハビリプログラムの基本的骨格を作製した。今後被験者を対象に検査及びプログラムを行い、その質を高めてゆく予定である。

### F. 健康危険情報

なし

### G. 研究発表

#### 1. 論文発表

Suzuki M, Sakamoto T, Kashio A, Yamasoba T.

Age-related morphological changes in the basement membrane in the stria vascularis of C57BL/6 mice. *European Archives of Oto-Rhino-Laryngology in press.*

Fujimoto C, Yamasoba T. Oxidative stresses and mitochondrial dysfunction in age-related hearing loss. *Oxid Med Cell Longev.* 2014;582849.

山岨達也、越智 篤: 聴覚に関わる社会医学的諸問題「加齢に伴う聴覚障害」. *Audiology Japan* 571: 52-62, 2014

山岨達也. 耳鼻咽喉科のアンチエイジング. 老人性難聴の予防. *Therapeutic Research* 35:808-810,2014

山岨達也. 聴覚のアンチエイジング. 女性の聴覚を保つには. *Modern Physician* 34:1287-1290,2014

山岨達也. 難聴の基礎と臨床, *Anti-aging medicine* 10:916-924,2014

Ochi A, Furukawa S, Yamasoba T. Factors that account for inter-individual variability of lateralization performance revealed by correlations of performance among multiple psychoacoustical tasks. *Frontiers in Neuroscience ; Front Neurosci.* 2014 eCollection Amemiya K, Karino S, Ishizu T, Yumoto M, Yamasoba T. Distinct neural mechanisms of tonal processing between musicians and non-musicians. *Clin Neurophysiol.* 2014;125:738-47.

#### 2. 学会発表

伊藤 健.「純音閾値モデル」を使用した聴力検査(マスキング)法の量的評価の試み. 日本聴覚医学会総会・学術講演会, 11.27-28, 2014. 下関

Akinori Kashio, Viral Tejani, Rachel Schepeler, Carolyn

Brown, Paul Abbas. Exploring the Source of Neural Responses in Cochlear Implant Users. The Annual Scientific and Technology Conference of the American Auditory Society. 3.6-8, 2014. USA.

櫻尾 明憲, 尾形 エリカ, 赤松 裕介, 柴崎 仁志, 岸本 めぐみ, 松本 有, 坂本 幸士, 狩野 章太郎, 柿木 章伸, 岩崎 真一, 山嵜 達也. 日本語版 UW-CAMP 音楽聞き取り評価テスト(J-CAMP)の作成. 日本耳鼻咽喉学会総会・学術講演会. 5.14-17,2014. 福岡

櫻尾 明憲, 尾形 エリカ, 赤松 裕介, 狩野 章太郎, 柿木 章伸, 岩崎 真一, 山嵜 達也. University of Iowa における人工内耳患者の聴力レベルと術後成績. 日本聴覚医学会総会・学術講演会. 11.27-28, 2014. 下関

狩野 章太郎, 山嵜 達也. 両耳間位相差の知覚に対する注意の影響. 日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会. 5.14-17,2014. 福岡

Karino S, Joris PX. A Cochlear Origin for Binaural Time and Phase Delay? Inner Ear Biology Workshop 2014 in Kyoto. 11.1-4, 2014. Kyoto, Japan.

狩野章太郎 赤松裕介 越智篤 山嵜達也 雑音負荷時の子音聴取 - 信号音源と雑音音源の空間的配置との関連 第3報 日本聴覚医学会総会・学術講演会. 11.27-28, 2014. 下関

山嵜達也. 加齢に伴う聴覚障害. 第59回日本聴覚医学会 11.27-28, 2014. 下関

山嵜達也. 老人性難聴の予防と治療. ラジオ日経「医学講座」 12.18, 2014

H. 知的財産権の出願・登録状況  
(予定を含む。)

なし

# 資料

図1 各年齢層における騒音下 s67 式語音検査の成績及び聴力像

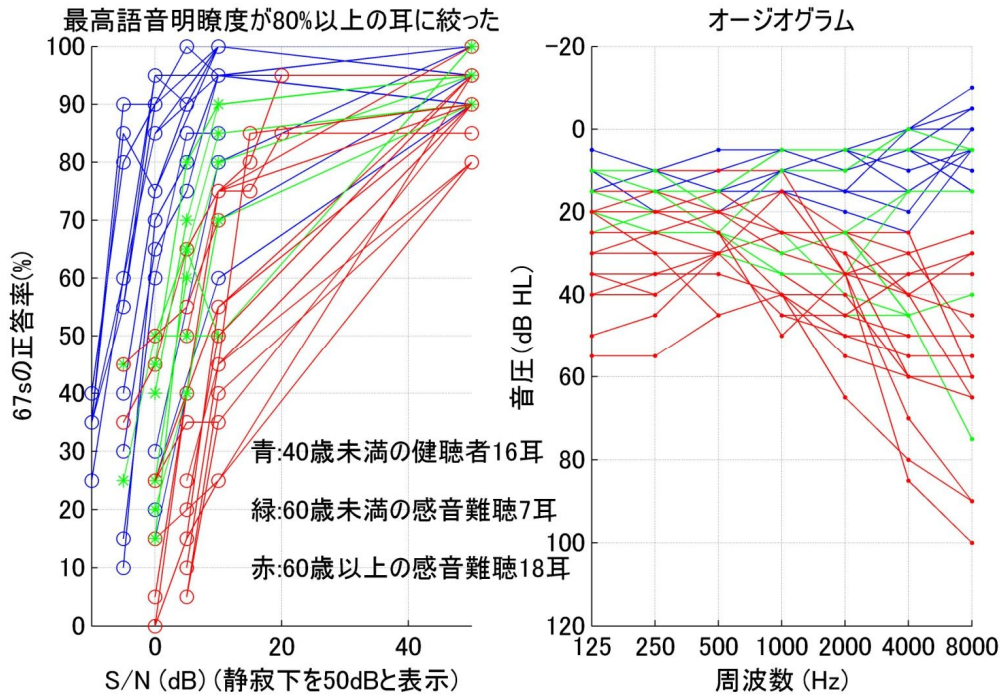


図2 長文節文章聞き取り成績 (健聴者6名の平均値)

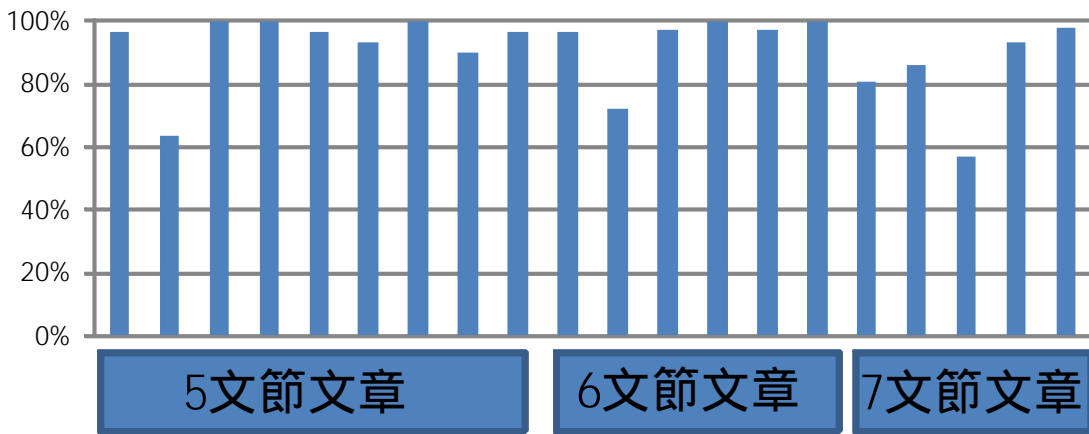


図3 若年健聴者を対象とした事象関連電位

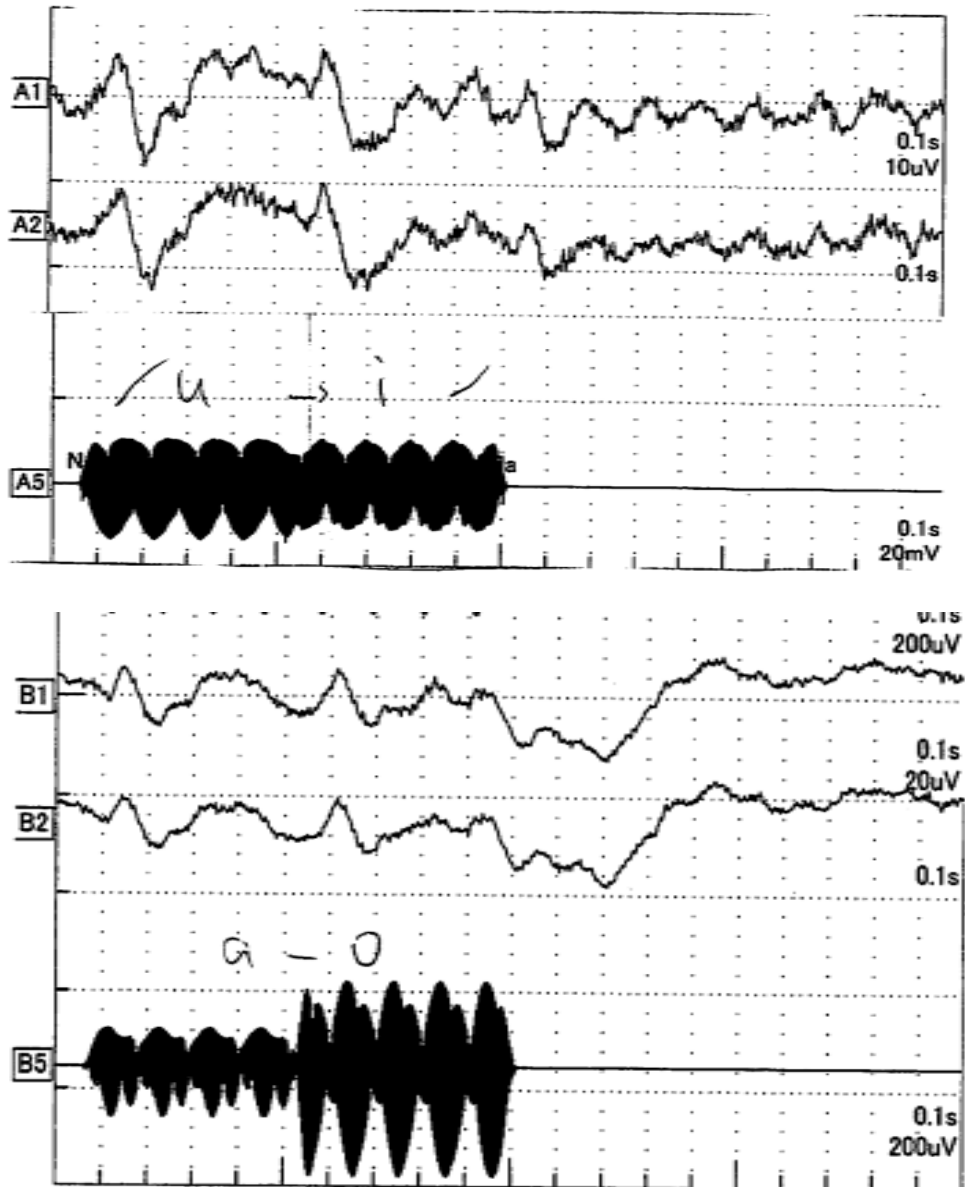


図4 リハビリトレーニングプログラム画像

